

保育計画成果報告書

法人名	社会福祉法人 札幌正栄会
施設名	宮の沢すずらん保育園
報告者	野澤 尚美(園長)
住所・連絡先	札幌市西区宮の沢 1 条 2 丁目 6 番 16 号 Tel 011-662-8181 E-mail miyanosawa@suzuran-hoikuen.net

○タイトル（保育計画）

小さな園庭の秘密基地

○主な助成備品

コンパンレッドハウス、テーブル、ベンチ

1. 実施した保育計画策定の目的

宮の沢すずらん保育園は札幌中心部から西側にあり山や川に囲まれ、人口 212,000 人が住む自然豊かな街です。保育園には産休明けから就学前、90 名の子どもたちが毎日元気に過ごしています。園舎 1 階は 0 歳児 1 歳児のお部屋、2 階は 2 歳児から 5 歳児、3 階はホールそして屋上となっています。

地上園庭の広さは 191.4 m²と子どもたちがのびのびと遊ぶには少々小さな園庭、今回第一生命財団様からの助成金を活用して、小さな園庭に相応しい『コンパンレッドハウス』『テーブル、ベンチセット』を置きました。

園庭ですから、遊具はすべての子どもたちが使うことができ、園の特色である「子どもたち同士で育ち合う、異年齢保育」に沿えることを第一に考えました。小さなお家を置くと、きっと子どもたちは、ままごとやかくれんぼ、喧嘩もするけれど子どもたち同士のやり取りが広がる場所になるだろう、こっそり秘密基地にしてくれるだろう、またテーブルやベンチは、お茶を飲みおやつを食べる休憩場所に、そして畑で収穫した野菜をクッキングする場にと思いました。

このような楽しい事を計画する他にも、保育士自身を中心に遊びを進めるのではなく一歩下がって子どもたちを観察してほしい思いがありました。遊びの主役は子どもたちです。私たち職員があらゆることを準備し整えるのではなく、まずは子どもたちがどのように遊びたいのか、何を求めているのか、どんな道具を欲しがするのか、また一生懸命考えてアイデアを出す子どもたちの手助けになること、子どもたちの発想を楽しみに見つめてもらいました。

2. 具体的な実施内容

小さなお家、ベンチ、テーブルがきた！
さっそく中に入っておままごとの始まりです。



0歳児はつかまり立ちに丁度良い高さです。
保育士と一緒にたくさん「いないいないばあ」を楽しみました。



「お外で食べるおやつはおいしいなあー」と子どもの声。時にはお茶を用意し、遊び疲れると自分でお茶を注いで飲んでいました。



—お外でクッキング—

畑から収穫した野菜をその場でゆでたり、切ったり。子ども達の目の前で
行うので嫌いな野菜もパクリ。取れた
ての味を覚えてくれたら…という願い
があります。



焼き芋の準備。葉っぱを集めてた
き火して…ができないので濡れた
新聞紙にさつまいもを包みさらに
アルミホイルを巻いて炭の中へ入
れます。テーブルの高さが丁度良
く準備が進みます。





雪が積もりました。なぜか必ず
といていいほど、子どもたち
は屋根についた雪をおとしてく
れます。お兄さんがやっている
ことを1歳児がまねして雪下ろ
し。



雪深くなったのでベンチとテーブルは室内へ
移動しました。
月1回高齢者との交流会で絵本を読んでもら
ったり、お茶を飲んだり、楽しい時間です。



3. その成果と評価

実施内容の通り、小さなお家やベンチ、テーブルには、たくさん子どもたちが集う場所になりました。お兄さんお姉さんがやっていることを小さなお友だちが真似をする、限られたスペースなので喧嘩もありましたが仲裁をしてくれる子どもたちの姿、ままごとやかくれんぼに限らず、屋根を使って帽子を渡しあう、夏場は水の掛け合いの避難場所、寒い冬の日「雪が降っているときにお家に入るとあったかいね」「しずかだね」という声を聞くことができました。また0歳児がお家を見てどのような表情をするのかとても楽しみにしていたところ、ハイハイをしながら近寄り、つかまり立ちをし「できたよ、みてみて」と言わんばかりの表情を向けてくれました。

季節を通して子どもたちが見たこと、触れたこと、五感を通してさまざまな体験ができました。特に外で行ったクッキングは収穫があるたびテーブルを利用しました。子どもの傍で行うと、ゆでた野菜の色が鮮やかになることを知り、香りを知り、味を知り、切った胡瓜から「水が出てきた」と驚きながら報告してくれました。子ども達はしっかり見て、体験しながら学んでいます。そして保育士も子どもの遊ぶ様子をじっくりと観察し、声を聴き子ども達の遊びがつながる様環境を整えていくことができました。

何よりもお母さんがお迎えに来たとき、子どもたちがお家へ誘う姿が多く笑顔でやり取りをしていたこと、お母さま方が穏やかな表情で子どもを見つめる姿、一緒に遊ぶ姿がとても素敵でした。

4. 今後の課題と展望

今後も子どもたちが学びあえる場として、子どもたちの発想を見逃さないようさらに活用していきたいと思っています。

また26年度夏、園開放を行い参加された親子と在園児で水遊びを楽しみました。家庭とはちがうお子さんの様子を見ながら、子育ての悩みを園庭に置いてあったベンチに座りお話を伺いました。少しの時間でしたがお話を聞いてほしいという思いがあること、保育園の様子をもっと知りたいということが分かりました。子育て支援活動についてはまだ十分ではありません。これからは地域に向けて少しずつ保育園から発信していかなくては、と考えています。その際に小さなお家やテーブル、ベンチを活用する場面をつくっていきたいと思います。

そして、宮の沢すずらん保育園の小さな園庭には『小さなお家』がある、いつも子どもたちが素敵な笑顔とともに集うことができる秘密基地、いつまでも保育園のシンボリックな存在になることでしょう。

以上

保育計画成果報告書

法人名	社会福祉法人はるかぜ福祉会
施設名	白石はるかぜ保育園
報告者（役職）	東海林 治樹（事務長）
住所・連絡先	宮城県白石市東町3丁目1番1
	☎ 0224-26-9330
	E-mail h-tohkairin@welfare-harukaze.com

○タイトル（保育計画）

3歳未満児：子どもの個々の可能性を引き出す保育環境の整備

3歳以上児：他者との関わりを円滑にし、想像力をはぐくむ保育の実践

○主な助成備品

▼ 3歳未満児

0歳児：ハイハイクライマーセット

1歳児：アニマルマグネット

2歳児：ひもとおし

▼ 3歳以上児

木とあそびS ボリュームLプラン

1. 実施した保育計画策定の目的

3歳未満児：乳幼児期の身体機能の向上、言語や知的好奇心の育成に取り組み、日常生活を送るための基本的な能力を獲得する。

3歳以上児：パーテーションによるコーナー遊びを子ども達に提供し、発達遅延児童に対し、自己が安心して遊びに取り組める環境を整備することを主とし、そこから他者との関わりを広げ、法人の保育理念である「考えることを喜びとする子ども」の育成に努める。

2. 具体的な実施内容

0歳児：坂道や段差のある場所をはいはいしたり、歩く経験をする。

はいはいや伝い歩き、歩行など様々な方法で登ったり降りたりすることを楽しむ。

1歳児：くっつけて遊ぶことを楽しみながら、指先の発達を促していく。

保育士と一緒に動物の鳴き声、色を発語しながら、言葉の発達につなげていく。

2歳児：ひとつひとつ形や色を選びつまんで通し、つなげることを楽しむ。また、つまむ・つかむ等の発達を促し、自分で考えて選ぶ経験をする。

3歳以上児：まずは発達遅延の児童(以下本児童を「A」と呼ぶ)に対し、パーテーションを利用した空間遊びを導入し、当該児童及びクラス児童が慣れることから始め、Aが制作活動等を落ち着いてできる段階までを一つの目標とした。

A が慣れた所で、次のステップとし、クラス全体、最終的に以上児全体(縦割り保育活動。以下「スマイルデー」と呼ぶ)で自ら役割を決め行う「ごっこ遊び」へとつなげることを最終目的とする。

3. その成果と評価

0 歳児: はいはいでクライマーに近づき、登ろうとする姿が多く見られた。最初は登ることが難しく、転んだり、待ったりしてしまい、なかなか進めずにいたが、保育士が励ましたり、手伝ったりすることで、徐々に上るということの経験を積み、登れるようになる。また、登れるようになると今度は自然と自らの力で降りるということもできるようになった。

歩行ができるようになってからは、壁を支えとした伝い歩きで登ったり、さらに歩行が安定すると坂道を駆け上がった姿も見られるようになった。

1 歳児: 始めは遊び方が分からずにいる子どもが多かったが、保育士が顔と体と足をくっつけて遊ぶことを知らせることで、自分でくっつけて楽しむ姿が見られた。また、違う動物の顔と体をくっつけて「あれ?」と言いながら、違いを楽しんでいた。また、ワニのしっぽを手に持ち、アイスに見立てて遊ぶ姿も見られた。

保育士が動物の名前や鳴き方を知らせることで「ブーブー」とブタを指さしながら発語したり、ワニの色を保育士に「みどり」と伝えてくる姿も見られた。低月齢児は保育士が動物の名前や色を知らせると繰り返し声に出すことを楽しんでいた。

2 歳児: 六種類(丸、三角、四角、星、ハート、魚)五色(黄色、ピンク、紫、緑、オレンジ)のひもとおしを日常保育の遊びとして取り入れている。一人一つずつの個人のマークを付けた紙皿を用意し、ケースから使用する分を自分で選べるように環境設定した。色別に集めひもに通す子や、形状を合わせひもに通す子どもなど、様々な姿が見られた。つなげ終わると、保育士に環状に結んでもらい、ネックレスに見立てて遊ぶ姿も見られた。



3 歳以上児: これまでの A の様子としては、室内の壁面や友達の動きに気を取られ、活動に集中できないことが多かったが、パーテーションを利用して室内に A 専用のスペースを作ること、気持ちを落ち着けようと自分からスペースに入る姿がみられるようになった。

また、仕切りのない場所で遊んでいると、他の児童がそばにいただけで「遊びを邪魔された」と感じ、情緒が不安定になることも多かったが、A専用のスペースを確保することで、自分の取り組みたいことに対し集中することができ、情緒が安定することが多くなった。それにより、いままでクラスメートから孤立気味であったAに対し、周囲もある程度理解するようになり、Aとクラスメートとの遊びや会話の流れがスムーズになっていった。

そこで、Aを含む以上児で、子どもたちの想像や興味を育む遊びができないかと職員間で検討した結果、「ごっこ遊び」と「コーナー遊び」を合わせた「子どもたちによる街づくり」をおこなうことに決めた。クラスにて街に必要な「人や物」を決め、準備し、スマイルデーにて子どもたち同士が役割を演じ、ひとつのコミュニティーを形成するという取り組みを現在も行っている。最初は「ままごとスペース」や「おうち」、「アスレチック」など自分達の身近な物や、取り組みたい遊びなどを自由に行っている状況であったが、回を重ねるごとに「お金」や「お店の商品」などの必要性に気づき、グループで分担してお金やお店で販売する商品を作り、子ども同士でやり取りする形態へと発展した。このことで、次の展開に対する期待感や、次はどうしようという工夫する気持ちが徐々に育まれてきたと感じる。

現在はスーパーマーケットや銀行、さらには温泉など様々なアイディアが子どもたちから飛び出すようになり、この「子どもたちが考える街づくりごっこ」はまだまだ進化するのではないかと期待している。



4. 今後の課題と展望

0 歳児:ハイハイクライマーの導入によって、転んでもよい環境をこどもたちに提供することができた。それにより子どもたちも何度も登り降りすることができ、身体機能バランスを育むことが出来たと考える。

今後は、ハイハイクライマーと合わせて、乳幼児期の運動機能向上にあった運動方法を保育者が学習し、さらに発展した活用ができるように取り組む。

1 歳児:アニマルマグネットを使用することで、1 歳児の発達に合った指先の機能向上を図ることが出来たと考える。日常生活では自分で靴下や靴を履けるようになる等、指先を上手に使えるようになってきたと感じる。また動物の名前や色を認識する一つのツールとしても役割を発揮し、言語の獲得の場面でも成長が見られた。

今後の課題としては、2 歳児で取り組んでいるひもとおしをはじめとした遊びによる指先の更なる機能向上および認識力の向上にどう繋げてゆくかということと、バリエーションを増やし、更なる好奇心を育む必要があると感じている。

2 歳児:4 月当初は月齢等によりばらつきがあり、ひもに通せても、出てきたひもをつまみ、引っ張る動作ができず、2〜3 個通して諦めるという子どもが多かった。しかし日々の遊びに取り入れることで、繋げる長さや速さに変化が現れ、指先の発達の向上が見られるようになってきた。とりわけ目を見張ったのが「つまんで引っ張る」という動作である。食べ物のふたを引っ張って開けることや、衣服のボタンを留めるなど、高度な指先の技術を要する動作が出来るようになり、子どもたちの自信にも繋がっている。今後の課題としては、箸をきちんと使えるようになるまでの工程構築と、どのようにすればもっと楽しんで遊びに集中できるかを保育者が研究する必要があるかと感じている。

3 歳以上児:当初は A が集中でき、かつ安心出来る環境の整備を主として考えていたが、A の情緒が落ち着くことで、周囲が A を理解し進んで A をサポート出来る関係までに至ったのは大きい成果だと感じる。そこから「子どもたちが考える街づくりごっこ」にまで発展できたのはまさに子どもたちの創意工夫の賜物と考えている。この遊びは次年度も継続して行い、子ども達のアイディアと主体性を第一に考えながら、活動に取り組む予定。

今後の課題としては、A の情緒に関して、保育園では安定しているが、小学校へ進学した時、環境の変化に周囲がどう対応していただけるかが気がかりである。とりわけ児童館を利用することとなれば、同級生との関係だけでなく、年長者との関係もあり、円滑なコミュニケーション(言葉のどもりや、集団行動不得手等)が図れるかが非常に不安である。今後、ハード面は勿論であるが小学校や児童館との連携はもちろんのこと、A や保護者が不安で困ったことがあればいつでも暖かく迎え入れてあげることが出来るようなソフト面での環境の構築が急務だと強く感じている。

以上

保育計画成果報告書

法人名	社会福祉法人 銀杏の会
施設名	多賀城すみれ保育園
報告者（役職）	鶴島恵理（園長）
住所・連絡先	宮城県多賀城市新田字北 1－3
	☎ 022-368-4302 E-mail t_eri@t-sumire.jp

○タイトル（保育計画）

保育環境未来形

○主な助成備品

配膳台、円形ラグ、製作シェルフ、ブリオ、変身セット、平均台など

1. 実施した保育計画策定の目的

保育士が「教えてあげる」「やってあげる」という考え方から、子ども自ら環境に働きかけて行動するという子どもの主体的な活動を保証し、それを援助する。

主体的な活動を保証することで、子どもの自尊感情を育て他者との関わりを喜び、社会に貢献できる子どもに育てる。

2. 具体的な実施内容

①円形ラグ 自分の好きなマークに座ることでみんなの顔を見て話を聞けるようにした。



【写真1】好きなマークの場所に座ってお集まり

②配膳台 配膳を子どもたちで行うようにした。



【写真2】自分たちで作ったジャムを塗って渡している

③平均台 一人ひとりの発達に合わせて、無理なく渡れるようにした。



【写真3】慣れないうちはカニ歩きで練習



【写真4】上手になるとジャンプ
もできるようになりました

遊びのコーナーでは、④変身セット、⑤ブリオ、⑥製作シェルフをそろえ、自分の好きな遊びを選択することで集中して遊びこめるようにした。

④変身セット



【写真5】役になりきって変身！ ボタンも一人で頑張れるようになりました。

⑤ブリオ（レールセット）



【写真6】

3歳児と5歳児が遊んでいるところに
2歳児が混ざってきて、真似をして遊び
始めました

⑥製作シェルフ



【写真7】 製作シェルフから好きな画材を選んできて、
3，4，5歳児がお絵かきを楽しんでいます。
保育士も加わり会話が弾んでいます

3. その成果と評価

- ①円形ラグ 集中して話を聞くことで、次の活動がスムーズに行えるようになった。
- ②配膳台 「いっぱい」「少し」がわかるようになり、相手を思いやって配膳できるようになった。自分で選択することで完食する子が増え、自信につながった。
- ③平均台 それぞれが自分のレベルを知り、怖がっていた子も自信を持って渡れた。
- ④変身セット ⑤ブリオ ⑥製作シェルフ
自分でやりたいことを選択することで、集中して遊び込める子が増え、異年齢での関わりが増えた。

4. 今後の課題と展望

子どもが主体的に活動を展開するために、生活の様々な場面で「選択する」事が出来るような環境を保育士がつくって行く必要があると感じた。今回助成を受けたおかげでより明確に課題が見えたので、今後も、子どもの発達に合わせた環境作りをしていきたい。

以上

保育計画成果報告書

法人名	学校法人栄光学園
施設名	認定こども園くるみの木
報告者（役職）	岡村順子（副園長）
住所・連絡先	〒962-0015 福島県須賀川市日向町194
	☎ 0248（94）2129 FAX0248（75）4869 E-mail aisei@orion.ocn.ne.jp

○タイトル（保育計画）

でんでこ山で遊ぼう

○主な助成備品

大型遊具（園庭設置）でんでこ山

1. 実施した保育計画策定の目的

歩行が完成していない子ども、歩行が完成したけれどもまだ安定していない子どもの身体的な機能の発達を促すことを保育計画の目的としました。

当園はもともと50年の歴史を持つ愛星幼稚園が愛星保育園を立ち上げ、2013年1月に認定こども園としてスタートしました。その際、園舎の移転を行いました。園庭には0～2歳児用の遊具を置くことができませんでした。

そこで、今回の助成金によって、子どもたちの運動機能が促進されるよう、大型遊具を設置しました。低年齢の子どものための遊具ですので、ほんわりとした形と山登りのようなイメージがあることから「でんでこ山」と名付けました。



でんでこ山と砂場



でんでこ山の斜面



手作りの贈呈プレート

2. 具体的な実施内容

【登る】

階段ではなく、ロッククライミングに使用する突起をつけ、足にひっかけて登ったり、突起をストッパーがわりにしたりして、バランス感覚を養えるようにしました。



突起を掴んで登る様子



足をひっかけて降りる様子



3歳児になると登るのも速い

【滑り降りる】

反対斜面はそのまま滑り降りるような平面としました。月齢（年齢）の小さな子どもは、保育者の手を借りて滑りますが、そのうち寝転ぶ姿勢で自分から滑るようになります。また、年齢が大きくなると、座らずに立ったまま降りることができるようになります。



突起のない平らな面



保育士が手助けして滑り降りる

【くぐる・砂場遊び】

トンネルをくぐるという全身運動だけでなく、少しかくれが的な要素を加え、子どもたちの大好きな場所にしました。また、トンネルをくぐった先に砂場を配置し、遊びがさらに広がることを考えました。



トンネルくぐりを楽しむ園児達



時には隠れ家として、
その先の砂場の入り口として

3. その成果と評価

- ① ただの滑り台ではなく、あまり高さはありませんが、山のぼりのような感覚で子どもたちが登っている姿が印象的であり、「でんでこ山」という名称がとても合っています。
- ② 頂上で、あるいはトンネルになっているところで、トンネルをぬけたところにある砂場で、いろいろな遊びが展開しており、子どもたちの関わりがたくさん見られるようになりました。
- ③ 0～2歳児の発達促進を意図して作られた高さ、大きさですが、3～5歳児や児童クラブの小学生もよく遊んでいます。ちょっと隠れることのできるスペースがあり、でんでこ山を通して、仲間で遊ぶ姿が多くみられたり、異年齢の子どもたちのかかわりが生まれたりしています。

4. 今後の課題と展望

- ① 異年齢の子どもたちが園生活を送っている保育施設ですが、さらに当園では0～5歳児の子どもたちに加え児童クラブの子どもたちも一緒に過ごすことがあることから、その際の安全確保が課題です。特に年齢の低い子どもたちが遊んでいる場合には、安全確保を大切にしながらも、年齢の高い子どもの遊びを制限・禁止するのではなく、安全に気を付けながら一緒に遊ぶ方法を、一緒に考えていくようにしていきたいと思っています。
- ② 登るための縄をつけるなど、今後もこのでんでこ山をさまざまに変化させながら、子どもの運動能力の発達を促進していきたいと考えています。

以上

保育計画成果報告書

法人名	社会福祉法人 徳真会
施設名	ほうとく保育園
報告者（役職）	齋藤徳仁（ 施設長 ）
住所・連絡先	福島県二本松市高田 2 番 1
	☎ 0 2 4 3 - 2 4 - 8 2 2 3 E-mail qqsb6my9k@lime.ocn.ne.jp

○タイトル（保育計画）

「あそび」を工夫して、子どもたちを元気に（ソフト積み木を通して）
——子どもが「あそび」を創造し、体験しながら発展させていく指導のあり方——

○主な助成備品

ソフト積み木（ソフトブロック）、バランスキューブ、滑り台、砂場、

1. 保育計画策定の目的

これまで何気なく行ってきた保育の必要性の再確認やプログラムを実施するうえでの問題点を確認し、きめ細かなプログラムを作成したい。子供にとっての「あそび」について、市販の「遊具」を購入し与えるだけでは解決しない。その意味や意義を問いながら実践し、振り返ることを繰り返すことが大切である。子どもの発達を問い直しながら、プログラムや環境を再構築していきたいと考えている。子どもの心と身体の成長にとって、「あそび」は、大きな意味があるということをもっと明らかにしていくことが必要である。そのためには、ただ遊ばせておけばよいのではなく、子どもの「あそび」を研究し、夢中であそぶことを十分に体験させることが大事です。保育者は、一人一人の子どもの「あそび」をよく観察し支援できることが大切であると考えた。

2. 具体的な実施内容

保育は確かに難しい仕事です。子どもが楽々と育っていくように見えて、その裏の**支え**と**仕掛け**と**深まり**を可能にするように、保育者が裏方で働いているのです。これからは「保育」を科学に変えていこうという取り組みが大切であると考え、仮説をもとにした意識的な研究をした。初めての研究に若い先生方は真剣に取り組んだ。

《研究仮説》

子どもが具体的素材（助成備品）をとおして、自由に「あそび」を工夫し、創造させ、楽しい子どもの「あそび」を保育者が支援してやることにより、子どもたちが主役になって活動するようになるであろう。

《観察の視点》

子どもが具体的素材（助成備品）をとおして、遊んでいる様子をよく観察し、記録しておく。

- ① 子どもが工夫した楽しい「あそび」を見つける。

- ② 子どもが毎日遊んでいることは、常に創造した「あそび」であることを念頭において観察する。
- ③ 保育者自身が小さい時、わくわくドキドキした感情を思い出して、もう一度そうした遊びへの期待感をもつような「あそび」を見つける。
- ④ 保育者自身が子ども時代、どんなことをして遊んだか、どんなことが楽しかったかを思い出して、子どもが楽しい「あそび」を見つける。

※子どもの「あそび」をじっくり観察することにより、「ひとり言」「なめる・にぎる・振る」「ほしいものに手を伸ばす」「興味あるものに自分から働きかける」「失敗もへいき」「人のしていることをまねる」「自分のイメージするものを形として表現している」等が分かる。

☆《実践例 1 》 (0歳児)

岡田幸江保育士

「子どもが工夫した「あそび」」

“私もカーテンにとどいたよ！”



「子どもがあそんでいる様子」

- 一人に一つずつ積み木を渡すと、順番に並べていく。すると、そこに座る子、渡り歩く子、ハイハイする子、などいろいろなことにチャレンジし始める。
- 一人が積み木を持ちだし、壁際へ行き、積み木を台にして、いつもは手が届かないカーテンに触り始める。他児もまねをして次々と壁際へ
- 「お片付けだよ！」という保育士の言葉かけにより、自分が使っていた積み木を保育士のところまで持って来て手渡す姿が見られた。

「子どもの工夫・新しい発見」

- 積み木を立ててみたり、2個まで積み上げることはできるようになってきた。一人が新しいことをすると模倣し、一緒に楽しみ、声を出して笑っていた。

☆《実践例 2 》 (1歳児)

大和志津香保育士

「子どもが工夫した「あそび」」

“滑り台の滑り方を工夫して”



[子どもがあそんでいる様子]

- 初めはお尻をついて座って滑っていた子どもたちだったが、一人の子が立って駆け下りると、その様子を見ていた他の子どもも真似をして立ったまま下りていった。
- しばらくそれを繰り返していくと、今度は頭から滑っていったり、横になって転がったりと、自分で滑り方を変えて楽しんでいた。

[子どもの工夫・新しい発見]

- 友だちが滑っているのを見て真似したり、難しい滑り方にチャレンジしたりする姿が見られた。

[保育者の支援] ●危なくないようマットの上にソフトブロックを置く。手を添える。

☆《実践例 3 》 (1歳児)

三浦早苗保育士

[子どもが工夫した「あそび」]

“積み木を重ねてあそぶ”



[子どもがあそんでいる様子]

- 初めは積み木の上に上がったりしてあそんでいたが、そのうちに次々重ねてあそび始める。
- 一人が高く積み重ねはじめると、みんな集まりみんなで重ね始めた。
- そして一度崩れたら楽しくなり、また、みんなで重ねては崩しの繰り返しであそぶ。
(「壊す」というあそび)

[子どもの工夫・新しい発見]

- 積み重ねると崩れてしまう。それが面白い！

[保育者の支援] ●次々に集まり、重ねられないので順番でやるように声かけをする。

☆《実践例 4 》 (2歳児)

小野征子保育士

[子どもが工夫した「あそび」]

“かくれんぼごっこ”



[子どもがあそんでいる様子]

- 4, 5人でバランスキューブを並べたり、重ねたりしてあそびだす。

- 少しの空間を見つけて二人の中に入って騒いでいると、周りの子どもたちも興味を持ち中に入ろうとする。
- 隠れているのを見つけた男の子と女の子が「鬼だぞー」と言いながら近づいてくる。
- 隠れていた子どもたちは、驚いて「キャー」と言いながら逃げ出したり、また戻って来て隠れたりしながらあそびを楽しんでいた。

〔子どもの工夫・新しい発見〕

- 2種類の遊具を組み合わせ、向きや角度を変えながら、隠れる空間を作ろうと工夫していた。

〔保育者の支援〕●隠れたり、出たり入ったりと動きが激しかったのであそびを見守った。

☆《実践例 5 》 (3歳児)

武田麻耶保育士

〔子どもが工夫した「あそび」〕

“バランスごっこ・電車ごっこ”



〔子どもが遊んでいる様子〕

- ソフト積み木を縦に立て、その上を慎重に登りバランスをとっている。
- ソフト積み木を大好きな電車の形に組立て、電車ごっこを楽しんでいる。

〔子どもの工夫・新しい発見〕

- 初めてソフト積み木を縦に立て、その上に上る。初挑戦！
- 友だちが上手に立つことができると、次々と並べ、長くしていた。
- 運転手になり、ごっこあそびを楽しむ。

☆《実践例 6 》 (5歳児)

相川友里恵保育士

〔子どもが工夫した「あそび」〕

“すべり台・砂場”



〔子どもが遊んでいる様子〕

- 登って頂上まで行く
- すべり台を滑る
- 下からバケツに砂を入れ、頂上の人に渡す
- 頂上を船に見立て、草や木で釣りを楽しむ。

[子どもの工夫・新しい発見]

●頂上で登れた達成感や頂上を船の上にしたりにしていた。

3. その成果と評価

《成果》

この研究を通してわかったことをまとめてみると、以下のようなことに気付いた。(上記実践例は一部分である)

- ① 創造的な内容の「あそび」
- ② 生活的な内容の「あそび」
- ③ 一人で楽しむ「あそび」
- ④ 子ども同士で楽しむ「あそび」
- ⑤ 造形性のある「あそび」
- ⑥ 身体的な内容の「あそび」
- ⑦ 表現活動的な内容の「あそび」
- ⑧ 構成的な内容の「あそび」
- ⑨ 美しいものに感動する「あそび」
- ⑩ その他に、頭の中でイメージして作り上げていく「あそび」 (積み木、ブロック、砂場など)
- ⑪ (壊す)という「あそび」・・・・・・大事なあそびである。

4 . 今後の課題と展望

「ソフト積み木」を利用して遊ぶだけでも子どもたちは全員、何時間でも、何日でも遊んでいる。保育園の子どもたちには<遊びながら学ぶ>ではなく、<「あそぶ」ことが学ぶ>であることがよく理解できた研究であった。子どもの生活の中核をなす「あそび」、保育者は子どもの「あそび」を、どのように考えればよいのか、よく観察することである。

《今後の課題》

- ① 子どもの「あそび」を発展させるために、保育者がどのような個に応じた援助・働きかけをしたらよいかを今後研究したい。
- ② 「あそび」は特定の目標を達成させることが目的ではないので、それぞれの子どもの個に応じた援助を考えなければならない。
- ③ 保育は確かに難しい。こうしなさいと指示してしまえば簡単ですが、それでは子どもの力はつきません。子どもの創造的な活動の様子をじっくり、丁寧に読み取り、次への支援の手立てを考えていかなければならない。
- ④ ただ遊具を与えておくのではなく、一人遊びの環境をどのように設定したらよいか。
- ⑤ 「あそび」を大切にする保育所のあり方
- ⑥ ゆったりとした時間の中で、子どもが夢中で考えながら、あそべる環境のあり方
そのために、子どもの見方も、教材の活かし方も、保育者は学ぶのです。子どもから学び、保育者同士が学ぶのです

「成果報告」ということで、初めて研究手法に基づいて1年間、全員で実践例を集めてみました。まだまだ研究というわけにはいきませんでした。子どもの「あそび」を意識的に観察する中で、あそびが発展していく様子・広がっていく様子・あそびの工夫・新し

い発見を観察できた。また、それぞれの「あそび」に対する支援を、個に応じて考えなければならないことの大切さも分かった。今後継続して研究していきたいと考えている。

以上